

川又 幸恵

## 1. 事業実施の目的

博士論文研究のために実施した第一回フィールド調査の補足調査

## 2. 実施場所

ベネズエラ・ボリバル共和国

## 3. 実施期日

2023年 10月 1日（日） ～ 2023年 12月 22日（金）

## 4. 成果報告

### ●事業の概要

#### a. 調査活動

##### 1. 研究の目的と概要

本事業は、申請者の博士論文研究「母乳哺育をめぐる民族誌的研究：ベネズエラ都市部の低所得層女性を対象として（仮）」について、第一回フィールド調査の補足調査を行うために実施した。

本研究の目的は、母乳哺育を実践する上での女性の意思決定の過程について、彼女たちの身体を伴う経験に着目しながら民族誌的に記述し、それらが地域や家族、ジェンダーの文脈のなかでどのように形成されていくのかを明らかにするものである。

ベネズエラにおける母乳哺育の推進は、生物医学的メリットを基礎として制度と政策が拡充され、実施される。しかし、母乳哺育に関わる母子保健の現場と、女性の母乳哺育実践との間にはズレが存在する。申請者は、これまで個人の主観的な経験とされ、母乳哺育推進者側から母乳哺育の知識として着目され難かった、母乳哺育の意思決定過程における女性の葛藤・調整・抵抗、そしてそれらの生成に関わる女性をめぐる社会関係に焦点を当てる。そのうえで、彼女らがどのように母乳哺育を捉え、実践へ向かうのかについて記述する。本研究は、母乳哺育の過程そのものの詳細な記述を試みる点で、既存の母乳哺育研究に新たな視座を与える。また、今後、女性の日常実践に寄り添った母乳哺育推進の支援のあり方を検討する際に活用可能な知識を提供することを目指すものである。

##### 2. 研究方法・研究内容

本事業では、以下3点について参与観察及びインタビュー調査によりデータを収集した。

###### 2-1. 母乳哺育を行う女性を取り巻く社会関係について

第一回フィールド調査のデータから、授乳女性を取り巻く家族関係は、複雑かつ期間限定的であるという特徴が見られた。女性は、その時々で自身と子のニーズを最も満たす社会関係を形成する傾向がある。これらの社会関係は、女性の身体を結節点とし、多様な乳児

栄養方法とその捉え方を継続的に生み出しているように見えた。よって、①女性を取り巻く社会関係がいかに生成されるか、その構造や人々の信念体系も含めて明らかにする。さらに、②それらがどのように女性の身体に作用し、どのような乳児栄養方法が生み出されるかを明らかにする。

## 2-2. 母親、子、周辺の人々という複数の行為主体の間で行われる母乳哺育

文化人類学の先行研究では、母乳哺育を形成する要素として、母親と周囲の人々、文化や社会構造などが着目されてきたが、授乳対象である「子」の存在はそれほど着目されていない。第一回フィールド調査では、女性が乳児栄養方法を決定する過程において、子の身体状況や子の反応が大きく関わっていた。第二回フィールド調査では、母親、子、周辺の人々という複数の行為主体の間で行われる母乳哺育、特に母子の間主観的な行為としての母乳哺育はどのようなものかを明らかにするための詳細なデータを収集する。

## 2-3. 低所得者層以外の社会階層の女性の母乳哺育について

本研究で対象としている低所得者層の女性の母乳哺育を相対的に見るために、比較対象として、低所得者層以外の女性がどのような乳児栄養方法を採用しているかについて調査する。

### b. 成果発表

申請者は、『第4回フェミニズム・女性学・ジェンダー学研究大会（スペイン語：IV Encuentro de Investigación en Femismos, Estudios de la Mujer y de Género）』テーマ『女性と平和：包括的平和へのコミットメント』（10月9日～11日、於：ベネズエラ中央大学）に参加し、「女性の集団的健康、平和と人権」というセッションにおいて、「ベネズエラにおける母乳哺育：ジェンダーの視点から」と題した発表を行った。

本大会は、「女性と平和」に焦点を当てている。近年のベネズエラにおける生活環境を取り巻く政治的・経済的状況を鑑みると、「平和」の意味と重要性は増している。本大会における「平和」とは、2つの当事者の上に武力紛争がないことだけを指すのではなく、人々が尊厳ある生活を送り、健康や教育の機会を得ているか、国の政治的決定に差別なく参加しているかといった、人々の生活状況も含んでいる。本大会では、様々な分野におけるジェンダー視点の研究を扱う。そのうえで、「平和」がどのように理解され、誰がそれを達成するための主要なアクターとなるのか、また、女性はどのような位置づけとして存在しているのかなどを議論することで、ベネズエラの文脈に沿った「平和」につながる目標の再設定と共有に貢献する話題を提供することを目的としている。

申請者が発表したセッションでは、女性にまつわる「健康」と「人権」をめぐってベネズエラで議論が盛んなテーマである、「セクシャル・リプロダクティブ・ヘルス」、「ジェンダーに基づく暴力」、「産科的暴力」、「女性の身体の自己決定権」などについて研究発表が行われた。

多くの研究発表では、ベネズエラ政治・経済危機や新型コロナウイルス感染症の拡大が、

ベネズエラ女性に対する「暴力」を深刻且つ複雑にしている様子が提示された。これにより、ベネズエラ女性を研究テーマとして扱う場合、彼女らがいかなる「暴力」の形態にさらされているかに着目することが重要であると理解できた。

## ●学会発表について

### 1. 発表の概要

本発表では、ベネズエラ都市部低所得層における女性を対象とし、彼女らの母乳哺育実践をジェンダーの視点から分析することで、女性の日常生活において、どのような諸要素が彼女らの母乳哺育方法の形成に関与しているかを明らかにした。

まず、ベネズエラの母乳哺育政策を概観し、当該国における母乳哺育研究の課題として、母乳哺育の実践を形成する多様な諸要素が、女性の周囲にどのように存在しているかについて着目されにくいことを提示した。続いて、母乳哺育研究におけるジェンダー視点とは何かについて、Emily Martin (2001) と Barbara Duden (1987) の理論を参考に考察した。そのうえで、申請者が2022年9月～2023年3月の期間で実施したフィールド調査に基づき、女性の母乳哺育実践に作用する様々な要素について、大きく4点に分けて説明した。また、女性自身が母乳哺育についてどのような捉え方をしているか、調査結果から説明した。

結論として、ベネズエラ都市部の低所得層が多く居住する地区の女性が実践する母乳哺育方法は、彼女らを取り巻く流動的な社会関係を通して得る母乳哺育の情報と、それらの社会関係に伴って変化する生活環境といった諸要素との相互関係の中で生成されていることを提示した。

### 2. 意見

ベネズエラ国民議会議員で、現在政府が推進する「人間的出産計画」プログラムの創設者でもあるビジェガス議員（医学博士）から、調査方法や研究対象者について質問を頂いた。

## ●本事業の実施によって得られた成果

### 1. 母乳哺育を行う女性を取り巻く社会関係について

本調査では、母乳哺育を行う女性を取り巻く社会関係について、以下2点を問いとした。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 女性を取り巻く社会関係はどのようなものか。またそれらの社会関係はいかに生成されるか</li><li>② 女性を取り巻く社会関係はどのように女性の身体に作用し、どのような授乳期の栄養方法が生み出されるか</li></ul> |
|--|

これらの問いを明らかにするために、申請者は第一回フィールド調査でインタビューを行ったインフォーマントとその親族の中から、彼女らの自宅での調査の承諾を得ることのできた5名のインフォーマント（うち3名は同居する親族）の授乳期の栄養実践、育児、そして生活の様子について参与観察を行った。

各インフォーマントには、本研究についての説明を事前に行ったうえで研究協力の承諾書にサインをしてもらった。

以下、5名の調査結果の一部を紹介する。

#### Aさん（33歳）

Aさんへの参与観察調査は、断続的に合計13日に渡って実施した。調査場所は主に、Aさんの自宅、Aさんが使用する自宅周辺の商業施設だった。また、許可を得てAさんが通う友人の家でも参与観察を行った。

参与観察調査を通して、Aさんの産前・産中・産後の社会関係は、彼女の自宅とその周辺の隣人、Aさんが参加する宗教団体の関係者、そしてAさんの参与観察調査を行う申請者を中心に形成されていることが分かった。また、Aさんの日常生活がどのように営まれているか、日常生活の中での隣人との会話のやり取り、そして生活に必要なモノの流れなどに関わる詳細なデータを収集することができた。

#### Bさん（33歳）

Bさんへの参与観察調査は、断続的に合計10日に渡って実施した。調査場所は主に、Bさんの自宅、Bさんが通う女性支援NGO、Bさんの夫の経営する露店周辺だった。

参与観察調査を通して、Bさんの産前・産中・産後の社会関係は、親族、元夫とその母（義母）、地域コミュニティの人々、地域コミュニティの仲の良い女友達、女性支援NGOの関係者、Bさんが参加するキリスト教福音派教会の関係者を中心に形成されていることがわかった。また、Bさんと日常的に会話を交わす中で、Bさんの家族観、母親観、両親との人間関係、女性としての身体的美に対する価値観などのデータを収集することができた。

#### Cさん（31歳）

Cさんへの参与観察調査は、断続的に合計6日に渡って実施した。調査場所はCさんの自宅だった。

Cさんの社会関係は、同居する親族、近隣住民、母乳哺育専門家、Cさんが中心となって運営する育児相談グループの母親たちを中心に形成されていた。Cさんが居住する家には、親族だけでなく、男女問わず友人が常に出入りし、必要に応じて食事、家事、育児といったケアを補い合っている様子が観察された。居住空間において、親族を超えた社会関係が構築される様子についてデータを収集することができた。

#### Dさん（22歳）（Cさんの妹）

Dさんへの参与観察調査はCさんと併せて行った。調査場所は自宅だった。Dさんは一日の大半を家事と育児に費やしており、調査期間中、Dさんが外出することはほとんどなかった。

Dさんの社会関係は、同居する親族、近隣住民を中心に形成されていた。Dさんにとって、授乳期の栄養方法をはじめとした子供の健康に関わる問題における、最も信頼する意見は姉であるCさんの意見であった。長男が病気で入院した時には、医師の指導が正しいかどうか、その都度Cさんに確認をしていた。Dさんには参与観察に加え、半構造インタビュー調査も行い、授乳期の栄養方法を含む子どもの健康について、実践方法の決定基準や、決定する際の心情についてデータを収集することができた。

Eさん（15歳）（Cさんの長女）

Eさんへの参与観察調査はCさん、Dさんと併せて行った。Eさんの社会関係は、同居する親族、近隣住民、学友、ダウン症の長男の様々な健康問題に関わる医療関係者を中心に形成されていた。Dさん同様、Eさんは長男への母乳哺育を含む健康問題に直面した場合、母親であるCさんに助言を求め、その助言を最も信頼していた。Eさんへは参与観察調査に加え、半構造インタビュー調査も行った。その中で、居住空間を同じくするDさんの育児方法や、Dさんの長男をめぐる親族や近隣住民との会話のやり取りが、Eさんの授乳期の栄養実践や育児を行う際の心情に影響を与えていることが分かった。また、Eさんの幼少期の経験と育児の関係についてもデータを収集することができた。

以上、5名のインフォーマントの参与観察調査及び半構造インタビュー調査を通して、2点の問いについて分析・考察するためのデータを収集することができた。

調査より、1点目の問いについて、彼女らを取り巻く社会関係が形成される背景には、ベネズエラの低所得層に多く見られる修正大家族という家族構造、薬物や暴力による家族関係の複雑化、男性優位主義的文化を基礎とした人間関係、経済的困窮、そしてこれらの問題を解決するための心の拠り所となり、さらには物質的支援も提供する宗教団体や女性支援NGOが存在していることが明らかになった。

また、2点目の問いについて、女性は彼女らを取り巻く社会関係を通して、母乳哺育について医学的優位性や母性強化といった従来の言説に留まらない個別の意味を持つ実践として再構築していることが窺えた。今後、博士論文研究として、これらのデータを踏まえ、母乳哺育の実践過程を詳細に記述していくことで、人類学分野における母乳哺育研究の新たな視点を模索したい。

## 2. 母親、子、周辺の人々という複数の行為主体の間で行われる母乳哺育

本調査では、母親、子、周辺の人々という複数の行為主体の間で行われる母乳哺育、特に母子の間主観的な行為としての母乳哺育はどのようなものかを明らかにするためのデータを取得することを試みた。

調査対象は、前章で紹介した5名のインフォーマントのうち、母乳哺育を行わないBさん以外とした。また、Aさん、Cさん、Dさんについては、本人の承諾を得たうえで、授乳

の様子を録画し、母子間の授乳におけるやり取りの様子をデータとして収集した。

その結果、①子どもが泣くことへの応答として実践される授乳、②母親から子どもへのコミュニケーションの一部として実践される授乳、③子どもから母親へのコミュニケーションの一部として実践される授乳の様子が確認できた。授乳をめぐるこれらの母子による詳細なやり取りや、それに関わる他者の介入に関わる分析を博士論文研究で行いたい。

### 3. 低所得者層以外の社会階層の女性の母乳哺育について

本調査では、研究対象である低所得者層の女性の母乳哺育を相対的に見るために、比較対象として、低所得者層以外の女性がどのような授乳期の栄養方法を採用しているかについて調査を試みた。しかし、調査期間中、インフォーマントの生活の都合を優先し、予定の変更が生じたため、インタビューを行うことができなかった。今後、zoom や SNS を介してインタビューを実施し、データの収集を行う予定である。

なお、本事業の調査で取得したデータを基に、現在「第 45 回ラテンアメリカ学会定期大会」(5月 25、26 日)での研究発表を申請中である。

#### ●本事業について

本事業の採択により、ベネズエラでの補足調査の実施が可能となった。また、当該国の社会情勢に配慮し、安全な調査の実施が可能となった。本調査を通して、今後の博士論文執筆の上で最も重要なデータを得ることができた。

本事業の採択に携わってくださった先生方並びにご担当者の皆さまに心より御礼申し上げます。